

私と子育て

一年 保護者

年末、従兄弟に第一子が産まれた。とても小さく、母に抱かれて眠る姿は、とても幸せな気持ちにしてくれる。その様子を見てみると、ふと、わが子が産まれた時のことを思いだした。

初めて抱くわが子を、何とも愛しく思い、五体満足に生まれたことに感謝し、元気に育ってくれば十分だ、と願った。

あれから七年。今ではすっかり成長した娘。年々、大きくなるたびに、心配ごと、願望も増えたように思う。心配だから：不安だから：思い通りにならないから？ 時にイライラすることもある。

でも彼女を見ていると、そんな気持ちもお構いなし。何とも空回りな思いに苦笑してしまふ。

子供は子供で毎日自分らしく過ごしているんだらう。

きっとまだ、大人のペースに合わせることは難しいだらうし、私の思い通りになんて、なるはずもない。

だからこそ、お互いを認め、尊重し合い、思いやれる関係でありたいと思う。

「いつてきまーす。」と元気に家を出る娘に、手を振りながら、そう思う、今日このごろです。

うまいもんは、うまい？

一年 保護者

「うまいもんは、うまい。」私が中学生のころ、外食チェーンのCMでよく耳にした宣伝文句である。最近、子どもたちに料理を作っていて、この言葉をよく思い出す。

外食チェーンのように、味付けを濃い目にする、子どもたちはよく食べる。買ってきた惣菜やコンビニ弁当、カップラーメンなども大好きだ。ファストフードに連れていっても喜ぶ。

一方、薄目の味にすると、残飯がたくさん出る。旬の新鮮なものが手に入ったと言っても、子どもにはその価値は分からない。ハモの湯引き、タチウオの塩焼き、焼きシイタケ。：。地産地消は体にいいと説いても、馬の耳に念仏だ。奮発して高級食材を買っても、素材を生かして味付けを薄くするから食べてもらえない。

「うまいもん」のはずなのに、うまくないようだ。

味付けの濃いものに慣れ、物足りないのだらう。これでは成人病が心配される。本当の「うまいもん」をうまいと思うよう導くことが、親の役割でないかと思う。なるべく素材にこだわり、化学調味料を使わない料理を心掛けたい。

保健師に聞いた話では、親が「おいしい、おいしい」と言いながら食べる姿を子どもに見せることが大切だそう。野菜などは子どもが本来、嫌いな味で、おいしいと思えば食べないものらしい。わが家でも実践して半年、まだ効果はないが、粘り強く本物のおいしさを訴え続けようと思う。

しかし、安くて手軽でおいしい惣菜や外食、これらの誘惑を断ち切るのは、親の方も大変である。

二〇一〇年を振り返って

音楽の楽しみ

二年 保護者

二年 保護者

二〇〇九年の年末に、わが家に三人目の男の子が生まれました。久しぶりの赤ちゃんの世話に、小学生と幼稚園生の兄弟の送迎に習い事、そして毎日の家事と大忙しの二〇一〇年となりました。

三男が生まれる前は、「男の子だから、赤ちゃんがいても、たいて世話をしないでだろう」と、上の兄弟に期待をしていなかったのですが、実際に赤ちゃんとの生活が始まると、そんな悠長なことは言ってもらえません。半ば、子供達に赤ちゃんの世話を押し付けて家事をこなすこともしばしば。案外面倒見のいい二人に、私が気付かないうちに成長していたんだなと感じました。

今までは、つい兄弟二人を比較して見てしまいがちだったので、三人目の子が生まれてからは、不思議とそういう気持ちも薄れてきました。「三人目にして初めて」なことが色々あって、改めて子供は一人一人別の人間で、それぞれ違っていいんだと気付き、より一人一人を個別に見れるようになった気がします。

忙しくて日々こなしていくだけで精一杯な一年でしたが、肉体的な疲労とは逆に、精神的には少し楽になれた「変化」の年になりました。「私が頑張らなくて」と、かたくなになりがちだったのが、自分一人ではどうにもならない状況が多くなって、自分の限界を知り、素直に人に頼ることの大切さを知りました。

しかし、私の余裕がなくてイライラが募り、子供にきつく言ったり、ガミガミ言ったりすることの方が多のが現状です。子育ては、親の内面の成長なしにはうまくいかないのでしょうか。「お母さんもしっかり育っていくからね。三人兄弟！」

「九才だったらまだ大丈夫。」私がバイオリンを習い始めた時に、先生から聞いた言葉です。父は時々バイオリンを弾いてくれましたが、兄や私には特に何も言わず、自分から言い出すのを待っていただけです。難しくて少しいやになってきた頃、時々学校で弾く機会があり、友達に聴いてもらうのを楽しみに練習するようになりました。高校受験の前に先生から「音楽を職業にするのか、違う道に進むのか」と尋ねられた時、「九歳……」とは「プロになるには」という意味があつたのか、と理解し、それだけの強い興味を持って、やめてしまいました。しかしその後、高校では突然クラシックを聴くのが好きになり、ちょっとしたマニアのようになりました。大学では合唱団に入り、音楽専攻の学生よりも熱心に練習して留年しそうになりました。子供の頃の音楽体験は少し遅れて効果が現れたようです。今は楽器を触る余裕はありませんが、毎年三月に、昔のドイツ兵捕虜と徳島の人々との交流を記念したエンゲル松江記念音楽会に合唱団員として参加するのを楽しみにしています。

次男の和音も、学校でバイオリンを弾かせてもらう機会がありました。「緊張したけど聴いてもらえるのが楽しい」と、私自身と全く同じ感想を口にしていました。また、冬になると、兄の響紀とともに、一味会の歌を歌ったり、練習の様子を楽しそうに報告してくれたりするようになり、聞いているだけで私も楽しくなってきました。良いホールで演奏する環境に恵まれ、子供達にも音楽好きになってほしいという期待は、かなり達成されています。

小さな手紙

三年 保護者

どうしても捨てられないものがある。娘からもらった手紙だ。手紙、といつてもほんの小さなメモのようなものだ。ある時はお気に入りの便箋、またある時はかわいいキャラクターのメモ用紙。大小様々な紙に書かれた言葉の数々を、私は密かにとつてある。妹が生まれた二歳の時、「ママと一緒に病院に泊まる」と泣いて家族を困らせた。その三年後、長男の出産で入院する私に、「まえはないけれど、こんどはがんばるね」

と手紙を書いてくれた。覚えたばかりの一文一文字に込められた娘の健気な気持ち、入院中の私を元気づけてくれた。枕元に飾っておいたその手紙を見て、助産師さんが言った。

「私も子供からもらったものを、もつととつておけばよかったと今になって思うんですよ。」

あれから四年。娘の字も上手になった。何気ない態度や表情に成長を感じる一方で、無邪気な子供時代に別れを告げつつあるようにも思える。増え続けていた小さな手紙も、この頃は確実にペースダウンしてきた。それでも時折一言二言書いて渡してくれる。休日に出かけた場所の感想や春休みに生きたい所、欲しいもの、さりげないアピール……。最後には「大好きだよ」の一言が添えられて。

こんな素直な表現も何だか期間限定の響きに思えて、ついとつておいてしまう。そしてあの時の助産師さんの言葉が、ふと心に蘇ってくる。

心の栄養

三年 保護者

「花に水をあげないと枯れてしまうように、心に栄養をあげない」と思いやりは小さくなる。その栄養分は本を読むこと」と他者への思いやりの心を育てるための方法として瀬戸内寂聴さんは「本を読むこと」を勧めていた。読書をするにより自分で体験できる小さな世界から未来・過去、外国や宇宙までも想像力という力で飛んでいける。更には他者の考え方、感じ方までも想像力で補われることになる。

文理小学校は「これだけ読もう」と読書を勧めてくれ、とても感謝している。さまざまジャンルの本に触れるだけで、無防備な子どもが「世界って広い」と感じるができるだろう。なぜなら、今の子ども達の世界は大人よりも窮屈で縛られて、閉じ込められた狭い世界に居るのではないかと感じるからである。それが、本を読むことで現実よりひどい世界、現実より素晴らしい世界があると感じられる事だろう。

本の種類を齋藤孝氏が離乳食に例えていた。高学年に出会って欲しい本は大人の本である。離乳食が終わり、しっかり噛み砕き、消化することで栄養分となる本と出会って欲しいと願う。おそらく高学年になり人生の悩みが芽生え始めると、自分を導いてくれる本と出会う事は、一生の友人を手に入れる様なものだろうし、思春期の混沌とした世界に差し込む一筋の光になると思う。

その様な本との出会いは子ども達が苦しい現実に向かって行くときに「大丈夫だよ」と言ってくれるに違いない。

今後も読書を勧め、ますます情操豊かな子どもたちに育ってほしいと願っている。

子は宝

四年 保護者

昨年、末の息子が入学し、我が家の四人兄弟は全員小学生となった。四人が揃って登校する姿は圧巻である。ランドセルをエイヤツと背負い、靴をひっかけ我先にと、ドタバタ飛び出して行く。急に静けさを取り戻した部屋で、私はホッとすると同時に、いつの間にか遅しく成長した姿に喜びが沸き上がるのを感じる。

子どもたちは、五年の間に次々と産まれてきた。五才、四才、二才、零才の時間が一番大変だった。自我が芽生えてきて言うことを聞かない長男、自由気ままに歩き回ってすぐに迷子になる長女。抱っこしていないと不機嫌な次男。「かわいい」と思う余裕などあったらどうか。ただただ「無事に育って」という気持ちの毎日だった。少しでも目を離すと何が起るか分からないから、なりふり構わず必死の育児だったように思う。

そんな日々の中で、衝撃の出来事があった。大阪の親戚を訪ねるのに、四人を連れて出かけた時のことである。ある店で、虚ろな表情の男性が突然話しかけてきたのだ。

「奥さん、子どもはかわいいですね。私にも子どもがいきました。丁度このくらいの男の子と女の子でしたが、阪神大震災で亡くしまして……。子どもは、ただ居てくれるだけでいいんです。子どもは宝ですよ。大事に育てて下さい。」

その人はそれだけ言うと、呆然とする私を残し立ち去った。

私は、あの人のあの訴えるような目が今でも忘れられない。深い悲しみを宿した目だった。「子は宝」だと言った、あの人の心からの叫びを、私は今も胸に刻みつつ子育てをしている。

ゆつくりじっくり伸びやかに

四年 保護者

新しい制服とランドセル。これからどんな楽しいことが待っているのだろうか、小さな胸を膨らませた娘。その娘のもみじのような小さな手を引き入学したあの日。目を閉じると、ついこの間のことのように思い出される。

月日が流れるのは本当に早いもので、娘の小さかったもみじのような手も、今では私と変わらないくらい大きくなった。背もいつの間にかぐんぐんと伸び、私の背を追い越しそうな勢いだ。ふと気付いた時、このような些細な出来事を通して、娘の健やかな成長ぶりを実感してしまう。

以前、クローゼットの中を整理していた時のことだ。娘が幼かった頃に身につけていた産衣や洋服が出てきた。すぐに娘を呼び、その産衣や洋服を胸に当てさせてみた。娘も、その産衣や洋服の小ささに驚き、声をあげていたが、それ以上に私の方が驚いていた。昔は、この小さな産衣に手を通してやるのがなかなか上手でできなかった。おっかなびっくり小さい娘の体を相手に、四苦八苦していた事が鮮明に思い起こされ、とても懐かしく感じられた。その頃と比べると、娘は本当に大きく成長したものである。あの頃は、早く大きくなってほしいという気持ちと、このままでいてほしいという気持ちが入り交じった複雑な気持ちであったが、今は娘の健やかで、伸びやかな成長が楽しみとなっている。

これからも、微力ながら娘の健やかな成長を見守り、ともに母として少しずつ成長していきたいと心から切に願っている。ゆつくり、じっくり、あせらずに伸びやかでありたい。

A親子に学ぶ

五年 保 護 者

卒業式が近づくと、私の子育てを見直す機会を与えてくれたA親子を想い出す。卒業式を翌日に控えた私は、生徒に想い出に残る贈り物ができないかと悩んだ末、〃石ころ〃をプレゼントすることにした。卒業後、困難に出会った時、梶井基次郎の『檸檬』よろしく、石ころを手にとって癒されて欲しいと思ったからだ。早速、石ころを購入し、生徒一人ひとりの顔と、一年間の出来事を思い浮かべ、漢字を一文字ずつ書いていった。卒業式当日、卒業証書とともに生徒に手渡すと、思いの外、感激してくれた。Aは、家庭的な子だった。成績も優秀で、何よりも気持ちの優しい子だった。そして、進路決定の三者面談で、彼女の母親と会い、彼女の優しさは母親のきめ細かな子育ての賜物であることに気づかされた。七月の暑い最中、教室に入ってきたAの母親は、すぐさま私に礼を言った。その日は球技大会があり、生徒は優勝の褒美にアイスクリームをゲットしていた。ささやかながら、他人のしてくれたことに感謝の意を述べる母親と、短時間の間に、その出来事を母親に伝えていたAに感心した。兄弟の多いAは、パン屋への就職を選んだ。試験は高倍率だったが、見事A一人が合格を手にした。決め手は、「あなたの一番大切にしているものは何ですか？」の問に、何の迷いもなく「家族です。」と胸を張って答えたことである。彼女の石ころに、私は『立』の一文字を書いた。きっと彼女なら、真面目に働き、将来独立し、自分の店を持つだろうと期待したからだ。パン好きの我が家の娘が、彼女の焼いた美味しいパンを食べる日が来るのもそう遠くないことだろう。勝気でまだまだ自己中心的な娘だが、彼女のように周囲の人々に可愛がられる女性になって欲しいと願ってやまない。

ありがたさを表現しよう

五年 保 護 者

人生八十年、ありがたいことに私たち人間は、長く生きられるようになったことで、昔の人よりもずっと長く子どもの成長を見守ることができるようになりました。親は子どもを愛し、一生懸命に育て、時には自分の命にかけてまでも守ろうとします。これは決して人間に限らず、哺乳類に共通する習性なのかも知れませんが。

毎日の生活の中で、あたり前のように過ごす日常、あたり前のように朝起きて、ごはんを食べべ学校へ行く、帰る家があり迎えてくれる家族がいる。そんなあたり前のことに、私たちはどれだけ感謝することができているでしょうか。

今年一月末、三年間の世界一周マラソンを終え帰国された間さんは、改めて日本のすばらしさや家族・友人のありがたさを感じ、これまでの不平不満を恥ずかしく思ったそうです。苦難や苦境に立たされた時に、初めてあたり前であったことの本当のすばらしさを感じるのかも知れません。まさに、自分自身に置き換えてみた時、親になって初めてわかる、両親や祖父母のありがたさと子どもを持つことの意味。

ありがたさを心の中で感じる、わかるだけでなく、ぜひ言葉や形として表現する努力をしたいものです。素直に「ありがとう」と言葉に表す、先祖に手を合わせて心の中で「ありがとう」と言う。きっとそのことは、私たちがあたり前の生活をしあわせな気持ちで送るために、これから先もずっと忘れてはならない、必要なことだと思ふのです。

公園ノススメ

六年 保護者

秋の参観日の終了後、子どもとその友人たちと公園へ遊びに行くことができた。ブランコ、ジャングルジム、鉄棒にかくれんぼ。公園で心もからだもときほぐされている子どもたちの姿を久しぶりにみることで、親もリラクセスできたひとときであった。

幼稚園の年長の頃からか、毎週金曜日は「公園の日」であった。子どもの親友のお母さんが誘って下さり、放課後に連れだつて公園へ行つた。たつぷりある宿題を毎日こなし、学校でも授業をしつかりきいている(?) だらうから、金曜日は解放してあげたかった。

低学年のころは親も鬼ごっこやドッチボールにおつきあひし、運動不足解消に役立つた。中学年では親友のご指導のもと、さかあがりの猛練習。重たいおしりが鉄棒の上をクルッと回つたときの大歓声。一緒に遊んでいた妹も、お姉ちゃんたちにとっても良い刺激をうけた。

私が子どもの頃は一人で公園に行つても、誰かと遊んで帰つてきたものだった。最近の平日の公園には先客はほとんどなく、日本の少子化を実感した。遠くから携帯電話をかざす盗撮男にも遭遇した。急いで鉄棒をやめさせて事無きを得たが、「子どもだけで遊ぶ」時代から「親も一緒に」の時代になったことを痛感した。六年生になつても忙しくなり、公園通いはお休みとなつた。与えられた課題に懸命に取り組んだ一年はあつという間にすぎようとしている。春が訪れ、また公園へ行ける日が待ち遠しい。もうおおかさんはこなくていいよと言われるかもしれないが。

運動会で感じた子供の成長

六年 保護者

我が家の子育てにおいて、小学生最後の年を実感したのは昨年九月の運動会の時でした。末っ子の明日香は長女と八年、長男と二年離れているため、私達夫婦は足掛け十四年小学校行事にかかわつたことになりました。

幸い今年度は快晴で、プログラムは滞りなく進行して行きました。仕事の都合で参加できる行事が限られるため、保護者競技の呼び出し係になる事が多く、わが子の参加する競技を見逃さないようにするのがやっとでした。しかし、今回はこのほほえみ担当になつたため、ゆつくりと各競技を楽しむことができました。

あつという間に毎年楽しみにしている全校リレーになりました。トップを走るのは半年前に小学生になつたばかりの一年生。全てが初めてで、学校が楽しくて仕方がないという気持ちがあふれています。学年が上がるにつれて身長が高くなり、がんばつてチームに貢献するのだという責任感でその表情が引き締つてきます。どんなにがんばつても追い越されてしまつたり、練習では早かったのに転んだり、色々なことが起こります。それでもチームの仲間は学年を越えて応援してくれます。六年生になるとぐっと雰囲気が変わります。四月から最高学年として下級生を引っ張つてきた自信でしょうか。自分のことだけでなく、下級生のお世話もしながら運動会の運営も考えることが出来る様になつたプライドの表れでしょうか。日常の生活では見ることのないわが子の成長を目の当たりにして、胸が熱くなりました。

六年間の先生方の熱心な御指導に対し心からお礼申し上げます。